

グローバル化のなかの文化

白石 哲郎

〔抄 録〕

本稿では、現代を象徴する社会変容過程として「グローバル化」をとらえ、まず、「文化」を基軸とした社会変動論の先駆的パラダイムを概観し、次に、その系譜下にある「文化」の「グローバル化」論を俯瞰して「文化」概念を新たに再定義し、そのカテゴリーのもとでの上記の諸理論の体系的な比較考察によって、「グローバル化」に対して「文化」が担う本質的な「機能性」の明確化を試みた。

その結果、今日、「文化」が社会に及ぼす本質的に重要な機能は、グローバルな制度や社会生活の「再帰性」に見出されるのではないかと考えた。

キーワード グローバル化、文化、機能性、再帰性

はじめに

今日まで文化人類学にとどまらず、社会学においても文化に重要な価値を見出し、その機能に着目した理論が提唱されてきた。ある特定の民族集団への実証的研究によって、その社会の秩序維持や安定といった側面を文化の果たす機能性として重視した文化人類学に対して、社会学では文化の担う機能を、より全体的な社会の変容と結びつけ、文化と社会のダイナミズムとの相互関係の解明を試みてきた。

もちろん、文化概念の定義のいかんによって、文化の機能性や、それに方向づけられた社会変動の理論内容に差異が生じるのは当然のことであり、それら諸理論における共通項を挙げるとするならば、文化自体の伝播や差異化、解釈過程が人間同士のシンボル（身体的態度と言語）によって規定されているということと、何よりも文化を基底とする社会変動の舞台が、あくまで国民国家の範疇における諸生活過程全般に設定されているという点であろう。

「社会学者のいう「社会」とは……近代になってからの話ではあるが、国民国家のことなのである」（Giddens 1991=2005: 17）とギデンズが指摘するように、当初、社会学における分析対象としての社会とは、暗黙裡に国民国家を意味していた。このことは、社会学というディシプリンが生み出された歴史的社会的背景に視座を向ければ明確となる。18世紀におけるイギリスでの産業革命と、フランス革命というふたつの経済的・政治的にエポックメイキングな事

象が及ぼした広範囲な構造的変容（資本主義経済の形成、共和制を基盤とする国民国家の形成、都市への人口流入、核家族化、産業技術の刷新）によって、近代社会が様々な矛盾を含む存在として人びとに再帰的に意識されるようになったことが、新たな学問構築の必要性を生んだ。

この状況下で、近代国家が内に抱える問題にたいする批判的考察を通じた理論的法則の構築によって、その解明への寄与を目指す社会学が提起されたのである。

したがって、文化を土台とする社会理論の先駆的パラダイムも、社会的変容の舞台設定においては一部を除いて例外ではなかったのである。

しかし、20世紀後半の四半世紀から現在にいたる社会変動を特徴付ける経験的な事象とは、グローバル化である。この科学技術の高度化を背景とした人・モノ・価値観・情報・経済的制度・政治的イデオロギーの超領域的フローと相互結合性の増大の過程によって、我々の物理的かつ、象徴的な相互行為の生活秩序は、地理的境界を克服して世界規模で拡張している。

そのため現代の文化の様相も、社会的機能も近代当初と比べると再構築を経て自明視されているはずであり、新たに文化と“グローバルな”社会変動との相互関係を説明するためには、従来の社会理論に代替する文化概念の再定義と、機能性の再解釈が求められよう。本稿で用いる機能性という概念は、全体としての社会の（安定的であろうと流動的であろうと）変化のために一定の領域（すなわち文化）が果たしている作用のことである。

本稿の目的は、文化に依拠する社会変動論の体系的考察をとおして、グローバル化にたいして文化が担う本質的に重要な機能を明確化することである。

方法としては、文化的社会変動論の先駆的モデルを、細分化された文化概念のカテゴリーごとに布置して概観するとともに、その理論史の範疇にあるといってもよい代表的な文化のグローバル化論を俯瞰して現代により適合的な形態へと文化概念を再定義し、そのもとで上記の諸理論のさらなる体系的考察を行っていく。

1. 文化を基軸とする社会変動の古典的研究

－「物質的」、「精神的」、「制度的」様式の総体としての文化－

本稿の目的であるグローバル化というポストモダンの社会変容⁽¹⁾における文化の機能性の明確化に先立って、文化にもとづく社会理論の先駆的パラダイムを概観していく。現代の社会変動論ともいえる文化のグローバル化論は、それらの系譜下に位置づけられるものであることをまずここで明記しておきたい。

文化という概念定義自体が複雑で、今なお議論の対象ではあるが、ここではイギリス人類学の父といわれるエドワード・タイラーの定義に依拠して、文化概念を“物質的”“精神的”“制度的”様式として類型化し、それらの枠組みごとに上記の先駆的な社会変動論を布置することで、その体系的な理解を試みる。

最初にみていくのは、ウィリアム・オグバーンとピトリム・ソローキンの社会理論であるが、彼らは文化という概念を、ともに物質的、精神的、制度的様式の総体と解釈しているように考えられる。この解釈は、タイラーの文化観（人間による知識、信仰、芸術、法、道徳、慣習とその他の多様な能力の複合的所産）に概ね準拠するものである。オグバーンの研究は、アメリカにおける文化社会学の先駆けであり、『社会変動』（1922）において、独自の概念構成によって文化と社会変容の関係性を説明した。彼は、人間を構成する要素として遺伝のような生物的、心理的な性質と自然的、社会的な環境を挙げる。なかでも社会環境を社会的遺産としての文化と同義のものととらえ、文化を物質的文化（科学技術）と非物質的文化（法律、知識、倫理）とに大別し、それらの発展（変化）を社会そのものの変動過程とみなした。つまり、文化の機能性とは文化自体の再帰的進歩であり、この過程によって社会の変容は規定されるのである。しかし、前者の物質的文化の発展過程は、その速度において常に非物質的文化の発展過程と相違（ずれ）を伴う。オグバーンは、この現象を「文化遅滞」と称した⁽²⁾。彼は社会変容を規定する文化の発展過程の要因を、文化が内包する「発明」、「蓄積」、「伝播」、「適応」という四つの性質に求めるが、とくに物質的文化では、蓄積がもっとも顕著であるために、既知の文化の修正と結合によって新たな文化的要素を生み出す過程である発明（これを規定しているのは社会からの必要性というニーズと、専門家の天与の才能を発明へと突き動かす社会的・文化的条件としての「文化基底」である）が促され、結果的に非物質的文化よりも急速に発展すると考えたのである（ゆえに、物質的文化と完全に調和された非物質的文化－「適応文化」－の範疇はわずかなものに限定される）。

一方のソローキンによる文化を基軸とする社会変動論は、従来の歴史哲学における認識とは異なり、文化の変化をその「波動」の循環に求めたものである。彼は四巻におよぶ大著、『社会的・文化的動学』（1937-41）において文化を、「観想的」、「観念的」、「感覚的」な諸様式に類別し、過去2500年にわたる芸術、倫理、知識、法律、技術、社会制度に関する史料と、1000をともに超える戦争と革命の記録の統計学的調査にもとづく検討を経て、「観想的文化」から「観念的文化」、そして「感覚的文化」という（各文化の優越的台頭の流れといえる）波動の循環過程によって、社会は歴史的に変動してきたと主張したのである。

「観想的文化」は、神を中心とする宗教的彼岸の価値を重視し、「感覚的文化」は、五感による快楽といった俗世的此岸的な価値を重視する社会的所産であり、「観念的文化」は、彼岸的、此岸的な価値の両方をもつ、観想的、感覚的文化の混合様式のことである。以上のことから、ソローキンの社会変動論における文化の機能性とは、端的に言えば、その波動の歴史的循環と、各々の文化において重視される価値に依拠した社会秩序の循環的形成ということになるだろう。

またソローキンは文化の波動は現在、14世紀以降比較的長期にわたって維持されてきた「感覚的文化」から、「観想的文化」への再移行という五度目の循環の只中にあると指摘し、結論として20世紀の社会こそは、マックス・ウェーバーのいう「神々の闘争」の如く、互いの文化を

ととして内在化された人間同士の価値観が激しく対立し合う混沌とした社会が顕在化する時代であるにとらえ、文化による現代社会の危機的変動について言明したのである。

2. 文明とは区別される文化—「精神的」様式としての文化

文化を物質的な社会的所産と明確に峻別して専ら精神的諸様式として定義し、社会にたいするその機能的な重要性を説いたのがアルフレッド・ウェーバーである。彼の提唱する文化社会学の目的とは、従来の歴史哲学において混同されていた文明と文化とを峻別し、文化が担う重要な機能性を明らかにして、その社会全体にたいする作用を構造的に分析することであり、最初から具体的な歴史的社会的現象を排除し、形式としての社会集団（その心的相互作用）を分析対象としたジンメル形式社会学の非具体性、没歴史性といった欠点を超克することであった。

アルフレッド・ウェーバーは、社会の歴史的全体である「歴史体」を構成する過程として、「社会過程」（人間の意志や衝動に依拠した具体的な社会的諸制度の変化の過程）、「文明過程」（自然科学における知識の生活過程への実践適用と科学技術の発達の過程であり、「発見」を特徴とし、伝播し蓄積されていく）、「文化過程」（人間による感情の所産としての理念、思想、宗教的信条、芸術分野における直観などの動きであり、一回性、突発性といった特徴をもつ）を挙げる（Weber, A., 1951）。これらは個々に独立し、他の過程と還元し合うことができない。このように文化をあくまで精神的な領域に限定し、そこから「分離した領域を、彼は文明過程と呼んだのである」（倉橋 1994：187）。

文化における機能性とは、この場合、文化過程と他の二つの過程との時代や地域に応じた多義的な相互作用であり、これにもとづいて顕在化する「歴史的・社会的状況」によって、社会は再帰的にその「歴史的現実を織りなしてゆく」（横山 1986：102）のである。

したがって、アルフレッド・ウェーバーが自身の文化社会学を一方で「総体社会学」と呼称したのは、上記の三つの構成要素の“総体”としての歴史全体の過程を考察対象としたためである。また、三つの異なる内容をもつ過程間の相互作用を経た経験的状況によって構成される歴史体を、西欧社会だけに限定せずに、東洋社会ばかりか古代社会まで包含していたことは、とくに彼の文化を軸とした巨視的な社会変動論が、その考察対象としての社会について、グローバルな時空間性の視座を早くも内包していたという点において、現代の文化とグローバルな社会変容に関する理論の先駆的モデルであることの重要なメルクマールといえるのではないだろうか。

3. 大衆消費社会における文化—「制度的」様式としての文化

近代における制度的諸様式（慣習化された行為や儀礼様式、組織化された制度機構）として

の文化と、社会構造との相関性に関する研究で著名な社会学者はピエール・ブルデューであるが、彼が体系化に努めた所謂、文化的再生産論は、とりわけ教育活動に関する中・上層階級と下層階級出身の子弟が、彼らの家庭での最初の「教育的働きかけ」を通じて慣習化される（それ自体、自明なものとして影響を行使する）教養、趣味嗜好、価値観、言語資本といった「ハビトゥス」に代表される、階級によって様相が異なる文化的な資本に対する教育システムの親和的ないし非親和的作用によって、進学、進級、学業成果上のヒエラルキーにおいて客観的にはもちろん、主観的な次元においても選別され、結果的に彼らの職業上の地位が世代間で再生産されるメカニズムを実証的研究にもとづいて解明したものである。ただ彼の文化再生産論は、例外の存在を経験的に認めるものの、社会秩序（階級構造）の支配と不平等の再生が文化資本と教育制度を媒介にして貫徹される過程の理論化が主要命題であり、ゆえに固定的な社会変動論として位置づけられるものであろう。本節の目的は、基本的に文化（の機能性）による流動的な社会変動過程を考察した社会学理論の概観であり、この観点に即し、かつ近代社会における慣習化された制度的文化の本質である消費過程と流動化する社会秩序との相互関係について、社会学的な分析を試みたのはジャン・ボードリヤールである。

20世紀に入って成熟した資本主義経済体制は、市場競争の恒常的な勝利のために絶えず生産性の増大という至上命令に拘束されつづける。したがって、製品市場における新たな需要の再帰的産出が企業にとっては急務となり、「生存の必要性を超えた時点で新しい欲望の開発が求められるようになる。」（丸山 2004：99）このような需要創出戦略のなかで20世紀以降、「消費そのものに価値を見出す「消費社会」が出現」（丸山 2004：99）したのである。

ボードリヤールはまさに、近代の大衆消費社会における慣習化された文化としての消費を規定する、膨大な消費者によって共有される社会的価値についての確な診断を下したことで知られている。彼は何よりも、近代からの熱狂的に加速する消費過程、「消費の加速度的増加、つまり巨大な生産力とそれ以上に狂乱的な消費力」（Baudrillard 1970=1995：.69）の動態を明らかにするためには、消費の目的や動機としての価値欲求について、モノの享受（所有）や使用価値ではなく、「差異的意味作用の動勢」（Baudrillard 1970=1995：.95）の観点から理解する必要性を説く。今や、「理想的な準拠としてとらえられた自己の集団への所属を示すために、あるいはより高い地位の集団めざして自己の集団から抜け出すために、人びとは自分を他者と区別する」（Baudrillard 1970=1995：.68）ために消費しているというのである。

すなわち消費は、何か最初から欲する具体的なモノの実際の消費（享受）によって満足や幸福感に浸りたいとか、購入前から予期していた特定の目的に使用したいといった自己目的的な欲求（価値）に依拠しているのではなく、個々人自らが内面に模範化した特定の社会集団（準拠集団）の地位にコミットメントし、自己を他者と差異化（差別化といってもよい）する社会的な価値において行われているのである。それは、自己の内面において流行化した模範的な「いくつかのモデル…これらのモデル…と一体となること、ある抽象的モデルやあるモードの複

合的形態に自己を特徴づけていくことにほかならず…人為的に数を減らされたモデルの生産」(Baudrillard 1970=1995:113)の過程であり、いいかえれば差異表示記号としてのモノを介して理想とする、よりヒエラルキーの上位に位置する集団のライフスタイルの実践、すなわち、模範的準拠集団のライフスタイル（これには人間の身体性も含まれる）へと自己のそれを同化していくことと同義なのである。

ボードリヤールの解釈においてモノは、特定の社会集団の地位の表象であり、自己の社会的地位と他者の地位とを差異化するための記号に他ならない。「それは常に差異表示機能として機能するのである。」(Baudrillard 1970=1995:65)

そして、大量生産の加速的更新の所産である差異表示記号としてのモノは、例外なくオリジナルとコピーとの区別すら消失させるほど精巧な模造品、つまり「シミュラクル」である。高度な複製技術の発達を基盤とするシュミラクルは、人間の絶え間なく繰り返される消費の営みに呼応して加速的に増殖していく結果、それらに対応するオリジナル（これらに宿るアウラ）すら存在しなくなる。なぜなら近代成熟期以降、あらゆるモノが最初からシミュラクルだからであり、もはやシミュラクルのシミュラクルがひたすら増殖していきだけなのである。

差異表示記号、またはその同義語としてのシミュラクルを媒介とした差異の達成の度に、人びとはとくに第一次的集団内の重要な他者とともに、日常的に互いの表示される差異を評価しあう。相互に異なるライフスタイル、すなわち差異表示された地位は、さらに成員間において交換が可能である。「コード化された差異は諸個人を分割するどころか、反対に交換用具となる…服装やイデオロギーや性の差異さえも、消費の巨大な連合体のなかで互いに交換される…もろもろの差異は互いに取り換え可能である。」(Baudrillard 1970=1995:121)

人びとは、互いの差異化された地位を競い合い、差異を（これをめぐる評価も含めて）交換しあうことによって得られる集合的な自己陶醉のために、いったんは孤独な群集となって消費に溺没し、再帰的に同輩集団へ参入していくのである。だが、差異表示を目的とする消費過程には、階層間で所有する財と差異化欲求との不均衡のヒエラルキーが厳然と存在し、所有する資本が少ない者ほど、差異化欲求の枯渇（または諦念）－「心理的窮乏化」(貧乏性的緊張)－に陥るという否定しがたい一面がある。

ただ、ボードリヤールによるとこの心理的危機は一時的なものであり、差異化への欲求は、大都市においてはむしろ、財と欲求との間の避けがたい不均衡ゆえに際限なく増大していくという。そして、文化としての消費過程が及ぼす機能性について、大都市ゆえの過大な人口密度や地位獲得競争、マスメディアによる広告戦略、(文化の)ルシクラージュ⁽³⁾といった経験的状况よりも、人間の消費欲求の再生産を規定する条件としてもっとも重要視する。それは、モノによる地位の差異化という個人的な次元ではなく、差異化の構造的な次元、すなわち、市民を彼らの意識の外側から絶え間なく消費へと駆り立てる、まさに差異化という「価値の社会的コ

ードの生産といった…直接的に社会的…全面的に集団的な機能」(Baudrillard 1970=1995:96)であり、社会変動論的観点に立脚すると、上記の集合表象としての差異化価値の創出は、これに強制されて行われる消費過程(ただし個々人は純粋に、これを主意主義的な意志選択の過程と認識している)によって大衆消費社会を形成し、そして諸個人を消費へと絶えず方向づけることでこの社会の「秩序そのものを再生産し」(Baudrillard1970=1995:68)ていくのである。

ボードリヤールは文化が担う機能性についてそれを、人びとの慣習として制度化された消費過程と、きわめて流動的な社会秩序とを結びつける媒介要素として位置づけているように考えられるのである。

以上のように、近代における代表的な文化を基底とする社会理論について、個々の理論において登場する文化概念をより細分化した形態のもとに布置して概観したが、次節からは、まさに現代の社会変動論ともいえる文化のグローバル化論の考察に入っていきたい。

4. グローバル化時代の文化

ー精神的象徴・マスメディアを介した相互行為・意味構築を伴う生活秩序ー

グローバル化とはマンフレッド・B・ステインガーが指摘するように、「グローバリティ」⁽⁴⁾へと我々の社会関係を移行させるダイナミズムを伴うために「常に変化という観念と対応しており、それゆえ、現在の状況の変容を表している。」(Steger1970=1995:11)したがって、それは世界規模での新たな社会性の顕在化の過程であり、社会科学にとっては「社会変化というテーマに関連した研究課題」(Steger1970=1995:11)である。

本節で考察するのは、グローバル化という現代の社会変容における文化の機能性の分析という観点から、フレドリック・ジェイムソン、ジョージ・リッツア、アンソニー・ギデンズ、ジョン・トムリンソンの理論である。これら諸理論は概ねグローバル化を、後期近代以降に顕在化してきた現代的事象であるという認識において共通する。そしていずれも、超国家的な社会変容の基盤として文化を位置づけているが、文化の社会変動論の先駆的パラダイムがそうであったように、文化概念の定義が異なるために当然ながら社会的変容の内実にも大きな理論上の差異が認められる。本稿では俯瞰を理論別に行うことで、グローバル化を規定する文化概念を新たに“三つに再定義”したが、このカテゴリーのもとでさらに彼らの理論を体系的に考察していくことで、文化が担う現代的な機能性の分析へとつなげたい。

文化を“精神的象徴”(この概念はトムリンソンのいう経済的な目的による営利活動を表象する、専門的言語としての「道具的象徴」に依拠しており、郷愁性や快適性、地位の差別化といった社会的な欲求にもとづく消費行為のシンボルとしての諸形式を意味する)としてとらえ、(とくに経済領域の)グローバル化との相互関係の分析に焦点を当てているのはジェイムソンとリッツアである。フレドリック・ジェイムソンの研究命題は、(彼の用法としての)ポストモダ

ニズムという新たな“時代性”を象徴する大衆文化の形式的特徴を、後期資本主義（多国籍資本主義とも表記される）というグローバルな経済秩序との関連において明らかにすることにある。ポストモダニズムへの分水嶺とは、アグリビジネスの台頭、広告および電子メディアのコミュニケーションネットワークの拡張、ファッションの流行スタイルの急速な変容、都市と地方間の居住構造の標準化、乗用車と高速道路網の国際的利用と配置などであるが、これら1960年代からの生産、消費、移動に関する相互作用ネットワークの稠密化はグローバルな市場の開拓に意味的に直結しており、多国籍企業を主体とする文化生産の秩序とポストモダニズムという時代性は分かち難く関与しあっている。

ジェイムソンは、「後期資本主義 (late capitalism)」によって規定される現代の大衆文化の特徴としてパステーシュを挙げる。これは先行する近代に息吹いたパロディーのように、既知の芸術スタイルの嘲笑や風刺といった潜在的動機や啓蒙的意図が喪失した、単なる「計画的旧式化」、つまり過去の「特定のユニークなスタイルの模倣であり、あるスタイルの仮面を付けることであり…空虚な…ユーモアのセンスなきパロディー」(Jameson 1998=2006: 16-7)である。

その実践例は、人びとの過去への回帰欲求を満たす特定の時代性を再現したノスタルジー映画や内装の構造上、ミニチュア都市のごときポストモダンの建築物（都市景観の再現）、踏襲した既知の文化言語間の折衷レトリックを物語表記の手法とする文学作品などである。

紙数の関係上、実際に挙げられているこれらの芸術作品名を網羅して、個別に検証していく作業は本稿では行わないが、いくつものパステーシュに共通する性質とは、いずれもが「ハイテク混合芸術」であり、そして「グローバルに存在していること」(Jameson 1998=2006: 48)だ。それは、まさに多国籍企業による広告戦略として不可欠な電子メディアネットワークが世界中に張り巡らされた後期資本主義社会の申し子の存在である。映画やテレビ番組、コンピュータ上で表現されるイラストレーション（フォトファリズムの一端）、インターネットで配信されるオンライン小説の類などは、電子マスメディアと視覚芸術との戦略的融合の所産であり、グローバル市場において日常的に消費されて我々に一連のイメージを共有させるのである。またポストモダニズムの文化は、仮にどれだけその送り手による（モダニズムの文化の使命であった）前衛的な意図に依拠していたとしても、もはや受け手である消費者にとってそれらは何ら前衛性に富んだものとは映らないという状況にある。なぜなら前衛性にもとづく実験の様式自体がいまや、急激に変化してきた消費者のモノに対するニーズとの間に親和性を帯びているからであり、あらゆる作品群があまりにも容易に大衆化され、ただ人間の快楽原則に忠実に準拠して享受されているのである。

しかし翻ると上記したような、ポストモダニズム文化を「安易に否認することが不可能であるところまで」(Jameson 1998=2006: 46) 至った現状こそ、一種の時代の病理性の顕現である可能性をジェイムソンは指摘する。彼の理論は、グローバル化時代の大衆文化の形式的性向

と人びとの非合理的ともいえる心理的性向との関連性の考察へと収束していく傾向にある。過去志向の視覚およびイメージ芸術の粗製濫造という絶え間ない文化的変化の心理的帰結とは、我々個人の人生に関する歴史的記憶の明確化という感覚の鈍化や自我の喪失、さらには文化の送り手における、現代社会の時代性を芸術的に視覚化しようとする主体性の衰退である。これはジェイムソンにいわせれば、後期資本主義「それ自体の恐ろしい告発…時間と歴史とに対応できなくなった社会に対する警告的・病理的な徴候」(Jameson 1998=2006:22)である。この見解は、後期資本主義文化の形式的特徴自体がグローバル市場に顕著なものである以上、我々の危機的な心理的性向も同じくグローバルな傾向にあるという認識を導き出すものである。そして同じく精神的象徴としての文化の内実の分析を通して、それらと現代のグローバルな社会変容との強固な関係性の解明を試みた社会学者のひとりがジョージ・リッツアである。

彼は「マクドナルド化 (mcdonaldization)」(生産から消費にまでいたるファストフードレストランの四つの合理的な原理の多様な社会領域への拡大)を具体的な下位過程に含む主に多国籍企業の長期的“成長 (Growth)”を目的に展開される活動過程を、グローバル化 (globalization)に代わって「grobalization (=growth+globalization)」と定義付け、この過程が産出する現代の消費文化の様相に着目する。「grobalization」とはグローバリティに関するリッツアの新たな概念であり、物質的利益や文化的政治的影響力の恒常的成長といった「国家、企業、組織などの帝国主義的野心、およびさまざまな地域に居座ろうとするそれらの欲望」(Ritzer 2004=2005:145-6)が、実際にそれら諸主体の活動を「地球規模の拡大に向かわせ」(Ritzer 2004=2005:xix)ていく過程であるが、特に彼が重視するのは、組織の収益と影響力の恒常的成長という至上命令、および欲望に依拠して展開される多国籍企業を中核主体とするグローバルな経済的実践過程である。

リッツアによると「grobalization」は、「資本主義化」・「マクドナルド化」・「アメリカ化」の三つの具体的な下位過程を含む運動であり、それらはいずれの過程にも完全に還元できないとはいえ「密接に関連し合って」(Ritzer 2004=2005:155)いるという。このような連関のもとで、「無 (nothing)」と呼ぶべき「特有な実質的内容を相対的に欠いており、概して中央で構想され、管理される社会形態」(Ritzer 2004=2005:4)、つまり形式合理性に富んだ精神的象徴の形態 (商品とその消費手段)の世界中への拡散と増殖が展開されていると主張する。「無」は、「一般的なもの」、「地元地域と結びついていないもの」、「無-時間的なもの」、「人間関係が乏しいもの」、「幻滅させるもの」という五つの“特性”と、「非場所」、「非モノ」、「非ヒト」、「非サービス」という五つの“領域”という、ふたつの要素から判定され、実例としてリッツアはショッピングモール・ファストフード・世界市場向けに大量生産された陶器・視覚的に同モデルの低価格車・インターネット (オンライン大学やショッピングサイト)・クレジット会社・クレジットカード・テレマーケッターなどを挙げる。

ただ「無」の「grobalization」は、たしかに多くの関係主体にとっては普遍性や利便性とい

う特性ゆえに順機能的に作用するが、別のある主体や対象にとっては非合理的で逆機能的に作用する過程でもある。種々の非合理性も同時に内包するマクドナルド化に、資本主義化、アメリカ化が連動しながら進行する「globalization」自体の非合理的帰結とは、ローカルな各地域の「存在 (something)」の衰退である。「存在」とは無の対概念であり、「特有の実質的内容」にかなり富んでおり、概して現地で構想され、管理される社会形態 (Ritzer 2004=2005:11) を意味し、リッツアはその例として、グルメ向け料理や、地元に密接した職人によって生産される陶器、地方の小規模大学、そしてスローフードなどを挙げている。

「無」、つまり「明らかに、中央で構想され、管理されるもののほうがグローバル化しやすい。逆に、現地で構想され、管理されるもののグローバル化は非常に難しい」 (Ritzer 2004=2005: xv) と主張するように、リッツアにとって無のグローバルな拡散と増殖は、「存在」というローカルな文化の形式を加速的に衰退と喪失へと向かわせるような、ますます支配的になりつつある抗いがたい時代的潮流であり、つまり「無」の「globalization」とは、文化の様式的多様化を示す「グローカル化 (glocalization)」を凌駕する文化の経験的な画一化 (ときに意図的にローカリティを外套としてまとい、この本質を隠蔽しさえしながら進行する) の過程なのである。

リッツアは、ジェイムソンの「後期資本主義」同様、現代における精神的象徴の様相を明らかにするために「globalization」の概念をツールとして用いることで、「globalization」を社会的変容の起点とする「無 (nothing)」と「存在 (something)」という、その影響力の栄枯盛衰をめぐる激しい葛藤を内包する文化形態に関する概念図式を提示したのである。

ただ、文化を物質的な消費財としてではなく、近代的諸制度の変容の駆動源としての相互行為 (コミュニケーション) ととらえているのがアンソニー・ギデンズである。彼はグローバル化を「さまざまな社会的状況の…結びつきの様式が、地球全体に網の目状に張りめぐらされていくほどに拡張していく…世界規模の社会関係が強まって行く」 (Giddens 1990=1993:85) 過程と定義し、モダニティ (17世紀に西欧で形成され、20世紀までに世界へ普遍化された国民国家を単位とする近代特有の社会的制度) がグローバル化された四つの制度機構 (「国民国家システム」、「世界資本主義経済」、「世界の軍事秩序」、「国際的分業」) を提示する。この認識においてグローバル化は、本質的に多次元的な社会変動過程を意味している。「モダニティは本来的にグローバル化していく傾向にある」 (Giddens 1990=1993:84) と指摘するギデンズは、その規定要素として科学技術や近代知を基盤とする近代の三つの根本的性質 (「時空間の分離」、「脱埋め込み」、「再帰性」) ⁽⁵⁾ の普遍化作用を挙げる。これによる急速でかつ広範囲に及ぶ社会のダイナミズムこそがモダニティのグローバル化に収束するのであるが、上記の近代の「ダイナミズムの三つの源泉」と同様に、彼はグローバルな社会諸制度の変容という重要な機能性を文化にも付与するのである。

西欧国民国家において確立された「工業主義」は、コミュニケーション技術の革新 (機械化

された印刷技術とそれに続くテレビやラジオ、国際電話といった情報機器の発達)をもたらしたが、工業主義の普遍化(「国際的分業」)によって、コミュニケーション技術も同様にトランスナショナルに普及していく。これに伴って文化も拡張していくのだが、この事態は、相互に結合した新聞に代表される印刷メディアと電子メディアが常軌的に利用される脱埋め込み化された広大な行為空間の創出と密接に関与している。ギデنزにとって、グローバル化によって特徴付けられる近代(ハイモダニティ)における文化とは、高度なコミュニケーションメディアを介したグローバルな相互行為(世界各地で生起する地理的に「離れた出来事」の日常意識への侵入)を起点とする多様な社会的情報の共有と共同活用)、すなわち「媒介された経験」なのである。彼が文化のグローバル化なくして「モダニティという制度の地球規模での拡大は多分にあり得なかった」(Giddens 1990=1993:100)と主張するのは、相互行為としての文化こそが本来的に近代の各制度機構に埋め込まれた根元的要素なためである。したがって、近代の三つの根本的性質同様に、(マスメディアを媒介とする)相互行為それ自体の普遍化によっても—それは経済的、政治的、軍事的、産業的制度下における相互行為空間の拡張を意味する—モダニティはグローバル化されるのである。

しかし他方で、グローバル化を規定する文化を、特定の理念行為のシンボルとしての道具的、精神的象徴やマスメディアを介した相互行為とする定義に対して、異を唱えるのがジョン・トムリンソンである。なぜなら、前者では人間の精神的実践の所産として象徴化されるものすべてが文化に包含されることになり、後者の場合は文化とコミュニケーション技術とが安易に同一化されており、いずれも「文化的なるもの」の本質をとらえているとはいえないからである。トムリンソンは文化の本質を、あくまで現在進行中の実存としての個々人の人生における目的意識の形成、つまり意味構築に関わる領域として把握し、文化を「人間が何か象徴的な活動を通じて意味を構築していくような生活の秩序」(Tomlinson 1999=2000:41)と定義する。したがって、我々の消費、労働、宗教、あるいは教育といった人生における快楽、幸福、安寧、名誉、自尊心のような何らかの意味の内在化を伴う相互活動から成る社会的秩序はすべからず文化の範疇にあるといえよう。トムリンソンは文化に意味構築を伴う生活秩序という定義を付与することで、グローバル化という「我々の時代の大きな変容のプロセスは…初めて正しく理解され…そしてこれらの変容が文化的経験の構造そのものを変化させ」(Tomlinson 1999=2000:14) するという側面さえも明確化させるとして、マクロな社会的変容とミクロな文化的現象との相互作用過程の解明のための鍵概念として文化を位置づけているのである。

5. 文化が担う本質的に重要な機能的側面

以上の考察を通じて、グローバル化という、多元的な生活領域に広範囲に及ぶ社会変動過程における文化の本質的な機能の明確化を試みる際、とりわけ有効と考えられるのがトムリンソン

ンによる文化観である。それは、意味構築秩序としてのローカルな文化が個人的および集合的な次元での社会的相互活動という帰結を常に伴い、このような「文化的結合性は、グローバルな近代的生活の再帰性という概念を導き出す」（Tomlinson 1999=2000：52）ためである。そして、我々の文化的営みによるグローバルな社会制度の再帰的変容という機能性は、さらにローカルな文化領域への再帰性のフィードバックをもたらし。それは修正を経たグローバルな社会制度を媒介とする「脱領土化（deterritorialization）」という、ローカルな物理的生活環境とそこに埋め込まれていた既存の文化様式との密接な関係性を衰退させるような、ある程度、普遍性を帯びた生活様式の創出や意識の内在化である。そして、この文化的事象が人びとを特定の行動に向かわせることで、再び制度的な再帰的変容が促される。

つまり今日では、文化は帰結としての身体的実践を通じて、グローバルな近代の制度とローカルな文化的事象との「再帰性（reflexivity）」（新たな情報にもとづく制度と文化秩序の不断の修正と変容）の相互促進を規定しているのであり、さらに「複合的結合性（complex connectivity）」（多様な社会領域を構成する諸要素間が多義的な脈絡のもとで複雑に結合した、グローバルな経験的状况）という側面をも強固なものとするのである。それは例えば、消費領域における我々のモノに対する新たなニーズが、第三世界に進出した多国籍企業が主導する現地の生産プログラムの修正に加え、雇用率の変動と環境資源の枯渇という多様な結合性を経て、ローカルな消費行為の流行を再創出していく場合や、先進諸国での新自由主義に特化した教育カリキュラムが、グローバルエリートの活躍を促すことで資本主義経済の国際競争を推進する一方で、反動としての経済格差の拡大や宗教原理主義の台頭という事態を生む結果、意図せざる意味構築を土台に、より民主的で多文化主義的な教育実践への転換が図られるといったケースが該当するであろう。

もちろん、グローバルな社会の構造的変容における文化の及ぼす機能性について、それをトムリンソンの文化観のみに還元するわけではない。精神的象徴や相互行為（コミュニケーション）として文化概念をコード化することは、グローバル市場の動態と、その下での人間のライフスタイルをめぐる価値の変遷の考察や、人間同士の相互行為の脱埋め込み化と近代的社会制度の普遍化、および（各制度間の）複合的結合性との関係性の解明といった重要な命題に対して、直接的に貢献する。

ただ、トムリンソンの文化概念が内包する機能性は、文化における「多様な個々のローカルな行動と最高レベルのグローバルな構造やプロセスとの結合性」（Tomlinson 1999=2000：53）という現代特有の社会的事象の“本質”に関与するがゆえに、今まさに重要といえるのである。

〔注〕

- (1) グローバル化は、モダンにおける「大きな物語」への不信（リオタール）によって象徴される現代

の時代性を示すポストモダンと密接に関係している。社会を構成する価値の断片化（モダンにおける社会分化と人間的主体性の解放の基盤であった階級に加え、階層やジェンダー、エスニシティ、人種のクローズアップ）や、大衆文化における「シミュラクル」の増殖（オリジナルとコピーとの差異の消滅）や混成化、企業の生産拠点の脱中心化と生産体制の柔軟化、小さな政府への転換による国民国家権力の分化といったポストモダンの多様な特性は、グローバル化の促進条件であるとともに帰結としての社会的状況なのである。

- (2) 「文化遅滞」の具体的事例を簡潔に挙げるならば、高度な経済成長期における急速な産業技術の発展に対して、環境汚濁に関する人びとの知識や倫理の社会化、野放図な企業活動の規制や産業上の自然災害を補償する法整備が遅れて対応しきれない場合などである。
- (3) ボードリヤールが現代社会の特徴としてとらえる「ルシクラージュ」とは、自身が所属する社会において必要とされる知識や資格を、時代の漸進とともに再帰的に更新しなければならない状況を意味しており、労働や医療、自然といった多くの生活領域にみられるが、文化の「ルシクラージュ」とは、消費市場におけるファッションやヘアスタイル、自動車といった差異化記号の流行のモードに関する情報を正確に受容し、周期的な再消費によって所有する消費財を交換していかなければならないことをいう。
- (4) スティーガーは、グローバル化概念の用法をめぐる無節操さから来る混乱を避けるために、グローバル化という、(あくまで) 社会変容過程によって顕在化する現在進行中の経験的状況を説明する概念として「グローバリティ」を用いることを提案している。スティーガーにとって「グローバリティ」とは、「多くの国境や境界線の意義を失わせるほどグローバルな相互連関とフローが、経済・政治・文化・環境の面で存在することを特徴とするような社会的状況」(Steger 2003: 邦訳9) である。
- (5) モダニティを創出した急速かつ広範なダイナミズムを規定する三つの根元的要素のうち、「時空間の分離」とは、機会時計の普及や西欧暦の標準化がもたらす普遍的な日付測定システムによるローカルな物理的環境としての「場所」から引き離された広大な「空白の時間」次元と、これに付随する「空白の空間」次元の出現であり、二番目の「脱埋め込み」は、人間の相互行為をローカルな環境から広大な時空間の枠組みへと開放して再構築することをいう。

そして三番目の「再帰性」とは、制度や個人による社会的活動が、社会科学（これ自体が考察対象の変容によって不断に修正される性向をもつ）のような近代的知識にもとづいて修正、つまり「つねに吟味、改善され、その結果、その営み自体の特性を本質的に変えていく」(Giddens 1990: 邦訳55) ことを意味する。

〔参考・引用文献〕

- ・ Baudrillard, J, 1970, *LA SOCIETE DE CONSOMMATION Ses Mythes, Ses Structures*, Editions Denoel. (= 今村仁司・塚原 忠 訳 『消費社会の神話と構造』 紀伊国屋書店、1995)
- ・ —, 1981, *SIMULACRES ET SIMULATION*, Editions Galilee, Editions Paris. (= 竹原あき子 訳 『シミュラクルとシミュレーション』 法政大学出版局、1984)
- ・ Eagleton, T, 2001, *Was ist KULTUR ?*, Beck C.H. (大橋洋一 訳 『文化とは何か』 松柏社、2006)

- ・ Giddens . A, 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press. (=松尾精文・小幡正敏 訳 『近代とはいかなる時代か? -モダニティの帰結-』 而立書房、1993)
- ・ 一, 1991, *Modernity and self identity: self and society in the Late modern Age*, Stanford University Press.
(秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也 訳『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』 ハーベスト社、2005)
- ・ Jameson. F and M. Miyoshi, 1998, *The Cultures of Globalization*, Duke University Press.
- ・ Jameson. F, 1998, *THE CULTURAL TURN*, Verso. (合庭 惇・河野真太郎・秦邦生 訳『カルチュラルターン』 作品社、2006)
- ・ 倉橋重史、1994、『社会学史点描』 晃洋書房
- ・ 丸山哲央、2004、「グローバル化時代の公共空間と知の形成－近代合理主義と仏教についての覚書－」
『佛教大学総合研究所紀要11号』 抜刷 97－111
- ・ 一、2006、「文化のグローバル化-グローバル文化論のための覚書-」『佛教大学社会学部論集 第42号』
抜刷 143－153
- ・ 宮島 喬、2005、『現代社会学 改訂版』 有斐閣
- ・ Ritzer. G, 1996, *The mcdonaldization of Society*, revised edition, Pine Forge Press. (=正岡寛司 監訳
『マクドナルド化する社会』 早稲田大学出版部、1999)
- ・ 一, 2004, *The Globalization of Nothing*, Pine Forge Press.
(=正岡寛司 監訳・山本徹夫・山本光子 訳 『無のグローバル化－拡大する消費社会と「存在」の喪失－』 明石書店、2005)
- ・ Steger. B. M, 2003, *Globalization : A Very Short Introduction*, oxford university press. (=櫻井公人・櫻井純理・高嶋正晴 訳 『グローバリゼーション』 岩波書店、2005)
- ・ Tomlinson . J, 1999, *Globalization and Culture*, University of Chicago Press. (=片岡 信 訳 『グローバリゼーション－文化帝国主義を超えて－』 青土社、2000)
- ・ 横山寧夫、1981、『増補 社会学史概説』 慶応義塾大学出版会

(しらいし てつろう 佛教大学研究員)

(指導：丸山 哲央 教授)

2007年10月3日受理